

『国家』第六卷から

— 善とその周辺 —

北斗高等学校

教諭 三浦

聡

—

プラトンの『国家』第六卷には、善のイデアが学ぶべき最大の学（メギストン・マテーム）として取り上げられている。その発端となるのは、ソクラテスがアデイマントスを相手に哲人政治の実現可能性について論じたあと、次のように述べるところからである。

「それでは、この点（哲人政治の実現）については、やっとこれで片がついたわけだから、次に残された問題へと移らなければなるまい。それは、こういう問題だった。つまり、われわれの国制の安全な守護者となるべき者たちは、どのようなやり方で得られ、何を学び何を業とすることによって育成されるのか、また、それぞれ何歳ぐらいのときにそれぞれの学問にたずさわったらよいのか、と」

「ええ、たしかにその問題を論じなければなりません」（五〇二D）。

こうして守護者となるべき者たちは、いろいろの快楽や苦痛、恐怖や労苦の中で験されて選抜されるが、最も厳密な意味での守護者（支配者）は、哲学者でなければならぬことが確認される（五〇三A—B）。しかし、哲学的素質のそれぞれが、全部集まって生まれてくるのは、まれにしかなく、大方はその一つ一つが、ばらばらに分かれて生まれてくる。そこで、

「ものわかりがよく、記憶がよく、頭の回転が速く、鋭敏で、…、しかも血気盛んで気宇宏大であ

るといった人たちは、君も知るとおり、静かでもの堅い生活を几帳面に送ろうとするような性質には、なかなか生まれついていないものだ。そういった人たちは、鋭敏であるがゆえに、時と次第でどこへでも突っ走って行く。およそ堅実なところなど、彼らからすっかりなくなってしまう」(五〇三C)し、他方、

「しつかりしていて、容易に変わらない性質の人はというと、これは信頼して付き合えるほうであつて、戦場で恐怖に直面しても、容易に動揺することはないのだが、これが今度は、学業に対してと同じ反応をすることになる。つまり、一種の麻痺状態に陥ってしまったみたいに、容易に動かさず、容易に学ばずということになり、この種の苦勞を通り抜けねばならないときに、居眠りやあくびばかりしている」(同右)

というわけで、両方の性質を立派に共有する者は、めったにいない。しかしながら両方を共有できない者には、最高度の精密な教育は受けられず、名誉ある地位や支配者の役職につくことも許されない(五〇三D)。

「そこで検査が必要になるのだ。さつき述べた苦勞・恐怖・快感などによる検査だけでなく、その上なお、さつきは触れないでおいたけれども、今それを言うるとすれば、さまざまの学科を用いて訓練してみなければならぬ。その過程でわれわれは、それが最大の学業(メギストン・マテーマ)にも耐えうる者であるかどうか、あるいは、学業以外の場合にそういう例があったように、怖じ気づいてやめてしまうことになりはしないかどうか、観察するわけだ」(五〇三E—五〇四A)。

このようなソクラテスの発言に、アデイマントスは同意するものの、ソクラテスの言う「最大の学業」が何であるのか、よくわからない。そこでソクラテスは、まず、前に話しあった(四三六A)「魂の三機能とそれに対応する知恵・勇氣・節制そして正義のことに触れて、次のように述べる。

「われわれは、こう言ったと思うのだ。これら（知恵・勇氣・節制そして正義）は、どうしたら最も美しい仕方で見ることができるといえば、それにはもつと別の、もつと長い巡行が必要なのであって、こういう長い道を巡り巡って行った者にこそ、それらは明白となるものだとね。しかしそうはしなくても、もう今までに言ってきたものがあるのだから、それと同列の説明を加えることだつてできなくはないとも言った。そうしたら君たちは、それで充分だと言ったのだ。それで、それはそういうこととして、あの時のことは語られたわけだ。それでは精密さにおいて欠けるところがあると、ぼくには見えたのだがね。しかしそれで君たちには満足だと思えたのなら、君たちのほうが、そう言うてくれればいいのだ」（五〇四 B）。

このソクラテス独特のアイロニーに、アデイマントスは、

「しかしわたしには、充分な程度に満足できるものに思えたのです。いや、わたしだけでなく、ほかの諸君だって、みなそう感じていたのです」（同右）。

と弁解するが、すかさず、

「しかし君、充分な程度にとか言うけれどもね、こういう重大な事柄については、真実のあり様に少しでも不足する不完全なところがあるなら、けつして充分な程度ということにはならないのだよ。なぜなら、およそ完全性のないものなど、いかなる場合においても何の尺度にもなりえないのだから」（五〇四 C）。と厳しくたしなめられる。こうして議論は再開し、国家と国法の守護者は、長いほうの道を巡り歩いて、体育におとらず学業においても苦勞しなければならぬ、とされる。そうでない、その本分に最もふさわしい最大の学業 V をいつまでたっても終わりまでやりとげることができないからである。そこで、アデイマントスはたずねる。

「つまり、今までののは、まだ学ばねばならない最大のものではない、ということですね？正義とか、

その他われわれが論じてきたものよりも、何かもっと大事なものがある、というわけですネ？」

「そうだ、もっと大事なものがあるのだ。のみならず、まさに正義その他のものについても、今までのように、たんに下図を眺めるというだけであってはならない。これを終りまで完全に仕上げるのをなおざりにしておくことは許されないのだ。それとも、どうだね、他のことだと、大して価値のないものでも、できるだけ精確な、まじり気のないものを手に入れようと懸命必死の努力をするのに、この最大の事柄については、それにふさわしい最大限の精密さを要求しないというのは、おかしいことではないか」(五〇四 D—E)。

ここで注意しなければならぬのは、知恵、勇氣、節制あるいは正義などの徳よりもへもつと大事なもの(テイ・メイゾン)があり、そして正義などの徳も、これまでのように、へ下図(ヒュポグラベーン)を眺めるだけでは駄目で、終りまで完全に仕上げるべきだ、とされる点である。では、そのへもつと大事なものVとは何なのか。またへ下図Vに満足せずに、終りまで完全に仕上げるとは、どのような意味で言われているのか。

二

このような疑問に対し、ソクラテスは意外に簡単に答えている。

「いずれにしても君はもう、それを一度ならず聞いたはずなのだがね。ところが今は、それに気づいていないのか、あるいは、そうでなければもう一度、ぼくにからみついて、逆に困らせてやろうと目ろんでいるかだ。たぶん、あとのほうだろうとは思っているがね」(五〇四 E—五〇五 A)。

といった調子で、本題に入る。

「とにかく、善のイデア（実相）こそ、学び知るべき最大のものだということは、君もたびたび聞いたはずだからね。この善のイデアがつけ加えられてはじめて正しい事柄もその他の事柄も、有用かつ有益なもの（クレースイマ・カイ・オーペリマ）となるのだ、と。……もしわれわれが、この善のイデアを知らずにいるとしたら、他に何をどれだけ知っていたって、それはわれわれにとって何の役に立つものでもないということ、ちょうど、われわれが何を所有したところで、そこに善が欠けていたのでは（アネウ・トゥー・アガトゥー）、何もならないのと同じだということも、君は承知のはずだ」（五〇五 A—B）。

すなわち、いかなる知も所有も善がともなわないかぎり、役にも立たないし、何の得にもならない、とするわけだが、それでは善とはいったい何なのだろうか。こうして対話は新しい局面に入るが、それにしては人々の善についての考えはさまざまである。ここでは、快楽説と思慮のはたらき説が吟味され、いずれも誤りであることが示される（五〇五 B—C）。

「では、どうだろう、こういう点は明らかではないか。正しいことや美しいことの場合には、そう思われるだけのもの（タ・ドクウンタ）をとる人が多い。たとえ実際はそうでなくても、そう思われる行為・所有を選ぶわけだ。ところが善いもの（アガタ）となると、ただそう思われるものというだけで満足する者は誰もいない。彼らは、実際にそうあるもの（タ・オンタ）を求め、たんなる思われ（評判）は、この場合にはもう、誰も有り難がらないのだ」（五〇五 D）。

このように重大な意味をもつ善について、もし一国の最高指導者たちが知らないままにいるとするなら、人々は彼らに万事を委託する気にはともなれない。なぜなら、正しいことや美しいこと（デイカイア・カイ・カラ）のいろいろが、どういうところで善いものとしてあることになるのか、その専門的な知識をもつ者のみが、国家の秩序ある構成を完全にすることができるところである（五〇六

A—B)。それにしてもやはり、善を充分に把握することは困難であると言わなければならない。

対話相手のアデイマントスは、ここで、いつも人にたずねるだけで自分の考えを述べようとしなくソクラテスに、善の説明を要求する。これに対し、ソクラテスは、

「しかしどうだろう、自分の知らないことについて知ったかぶりの話をするのは、不当でないとも君は思うのかね？」(五〇六C)。と言って、言明を避けようとするが、グラウコンからの要請もあり(五〇六D)、しぶしぶ承知する。

「まあ、とにかく、おめでたき諸君よ。善がそれ自体としては何であるかということとは、今は問題にしないことにしよう。なぜって、さしあたりぼくに思われている分だけでも話のなかに入れようとしても、これは、今の調子だと、力に余ることだと、ぼくには思えるのでね。その代わり、善が生み出したもので、善にきわめてよく似ていると見られるもの(ホス・デ・エクゴノス・テ・トゥー・アガトゥー・パイネタイ・カイ・ホモイオタトス・エケイノ)を話すことにしたい」(五〇六D—E)。このようにして、いわゆる太陽の比喩が語られることになる。

三

話の切り出しに、まずソクラテスは同意事項の再認を持ち出している。それは、これまでの話(四七五E)の中でも、他の機会でも何度か述べたことだ、という。つまり、

「多くのいろいろな美があり、多くのいろいろな善があり、またそのようにして、それぞれいろいろなものがあるというのが、われわれの主張なのであって、それらの多をわれわれは、議論の上で区分を必要とするものとして取り扱うのである」(五〇七B)。

とし、さらに、

「それからまた、いいかね、美そのもの（アウト・カロン）を措き、善そのもの（アウト・アガトン）を立てることにしたのだ。そして、さっきの場合、多としておいたものすべてについて、そうしたのだ。今度は逆に、そのおのおのの一つ一つの相をなしている（イデアン・ミイアン・ヘカストゥー）のに応じて、そこに単一の相がある（ホース・ミイアース・ウーセース）と定め、おのおのをまさにあるもの（ホ・エステイン・ヘカストン）と呼びなしているのである」（同右）。

ということであつて、まさしくイデア論の簡潔な説明である。しかし、このあとの議論は意外な展開を見せる。

「われわれの主張だと、さきのもの（多）は見られる（ホラースタイ）けれども知られる（ノエイスタイ）ことはない。他方、実相（イデア）のほうは、知られるけれども見られることはないのである」（五〇七B）

「ところで見られるものは、われわれ自身の何によって見られるのかね？」

「視覚（ヘー・オブスイス）によつてです」

「それならまた、聴覚によつては聞かれるものを聞き、その他の感覚を用いては、すべて感覚されるものを感じるのではないか」（五〇七C）。

ということ、聴覚と音声をはじめとする多くの感覚機能は、それぞれのはたらきをするのに第三者を必要としないことが明らかにされる（五〇七D）が、視覚とそれによつて見られるものは、他に第三者を必要とするのだ、という。

「思うに、眼の中には視覚が宿り、これをもっている者がその視覚を用いようとしてかかり、見られるものの上には色どりが現にあるとしても、第三の種族（ゲノス・トリトン）でとくにそのために

本来あるところのものが立ち合うのでなければ、君も知っているように、視覚は何も見ず、色どりも見られることがないだろう」

「いったい何なのです。あなたが必要だと言われるそれは？」

「それはつまり、君が光（ポォース）と呼んでいるものさ」（五〇七 D—E）。

他の感覚機能と異なり視覚は、見られるものとの間に光が介在してこそ、その機能をはたらかせることができる。そして、その貴重な光がわれわれのために、視覚は最良の条件で見、見られるものは最良の条件で見られるようにするのが太陽（ヘーリオス）なのである（五〇八 A）。だが、視覚の太陽に対する関係は、単純に規定できない。それは、視覚が太陽であるということもないし、また、視覚がそこに生ずるもの（すなわち眼）が太陽であるということでもないからである（五〇八 A—B）。しかしながら感覚器官のうちでは、眼（オプタルモイ）は、最も太陽に似たもので、眼のもつ機能は、太陽から注ぎこまれるようにしてまかなわれていることも確かである。それに太陽もまた、それがすなわち視覚であるということではないが、視覚の原因となっていて、視覚そのものによって見られるということがある（五〇八 B）。

これらの議論に引続き、ソクラテスは次のように述べている。

「それならば、この太陽が、善の生み出したもの（トン・トゥー・アガトゥー・エクゴノン）とぼくが言おうとしていたものと宣言してくれたまえ。善は、これを自己と同じ比をもつものとして生み出したのだ。つまり、善が、可知界にあって、知るものと知られるもの（タ・ノウメナ）と対してもっている関係は、可視界において太陽が、見るはたらき（視覚）と見られるもの（タ・ホローメナ）と対してもっている関係なのだ」（五〇八 B—C）。

しかしアデイマントスが、この関係についての説明を求めるので、昼夜における視覚の明確性の相

違を例に説き、さらに魂との関連に言及して、

「それなら次には、魂のことも、こういうようなものと知ってもらわなければならない。つまり、真（アレーティア）と有（ト・オン）がよく照らしている事物に向かつて魂がすえつけられるときは、知がはたらいでその事物を認識し、知性がある（ヌウン・エッケイン）と見られるけれども、しかし暗黒のまじったもの―生じ来たりて亡び去るものによりかかるときは、思いなすばかりで、その思いなし（ドクサゼイ）も上下いろいろに変転することがあって、知のはたらきもぼんやりとにぶるから、今度はまた知性をもっていない、と同じようなことになる」（五〇八D）。と語られる。この場合、認識されるもの（対象）に真を授け、認識するもの（魂）にその機能を提供するのが、善の真相（イデア）にほかならない。しかも善のイデアは、知識と真実性との原因であるとともに、それ自体も認識の対象となる。さらにまた、その知識と真実性はどちらも大変美しいものだが、善はこの兩者とは別のものであって、兩者よりもっと美しいものである（五〇八E）、とされる。

こうして善のイデアについての説明は、一応終わるのであるが、ソクラテスは善の似像（エイコーン）としての太陽をもっとよく観察してほしい、と言って、

「太陽というものは、見られる事物に対して、まさに見られるという機能を発現させるばかりでなく、また、その事物の発生と成長をうながし、これに栄養を供給するものでもある」（五〇九B）。ということを考えて、善のイデアについても、

「認識される事物に対して、まさにその認識されるということが、善によって現実化されるばかりでなく、そのあるということ（ト・エイナイ）、その実在性（ヘー・ウースィアー）もまた、善によってこそそれらのものにそなわるようになるのだと言わなければならない」（五〇九B）。

と、する。そしてさらに、太陽における光と視覚、善における知識と真実性、これらはいずれもそれ

それ似て非なるものであることが指摘された（五〇九 A）が、ここでもまた、太陽と生成、善と実在性のそれぞれが同じものでないことが注意される（五〇九 B）。

相手にたずねるばかりで、自分の考えを述べようとしないうと問いつめられて仕方なく、善それ自体について話すことはできないが、善の生み出したもの（子供）あるいは元金の生み出す利子（五〇七 A）についてなら、ということが始まった善の説明であるが、まだ不足の点は多いと言わねばならず、グラウコンはさらに説明を求めている（五〇九 C）。

四

さて、『国家』では三つの比喩、すなわち、太陽・線分・洞窟のそれぞれの比喩が語られている。まず、太陽の比喩はこれまでに見てきた通り、善のイデアが太陽との比較の形で、そのはたらきの意義と重要性が強調された。しかし、ソクラテスも認めるようにまだ十分に説明されたとは言えない（五〇九 C）ので、新たな説明が試みられることになる。これが、第二の線分の比喩である。

「われわれの言おうとしているところでは、さきの二つのもの（善と太陽）があって、一つは思惟によって知られる種族と知られる領域（ト・ノエートゥー・ゲノス・カイ・トプゥー）に君臨し、もう一つは見られる種族と見られる領域（ト・ホラートゥー・ゲノス・カイ・トプゥー）に君臨している、ということだ。……とにかくこの二つの種族は、わかるね？可視界（ホラートゥー）と可知界（ノエートゥー）と」（五〇九 D）。

「それでは、ここに線分（A B）のようなものがあって、これが互いに等しくない線分（A C・C B）に二分されているとしてくれたまえ。それからこれら二つの線分の一つ（A C）は見られる種族

(ト・トウー・ホローメヌウー・ゲノス)を表わし、もう一つ〔C B〕は思惟によって知られる種族(ト・トウー・ノウーメヌウー・ゲノス)を表わすとして、それぞれを同じ割合(比)に従ってもう一度分割してくれたまえ。そうすると君は、相互に明確・不明確(サペーネイア・カイ・アサペイア)の差別をもつものが、そこに表わされているのを見るだろう。すなわち、見られる領域の線分〔A C〕においては、そこに二分された一つ〔A D〕が似像(エイコネス)を表わすものとしてだ。ところで、ぼくが似像というのはまず第一に影(スキアイ)それから水面に映る像をはじめ、その他、質が密で、滑らかで曇りのない構成をもつものの面に移る影像など、すべてこのようなものことだ」(五〇九 D—五一〇 A)。

「それから、もう一つの線分〔D C〕のほうは、似像が似ている当のものを表わすと仮定してくれたまえ。つまり、われわれの周囲にいる動物や植物、あるいは人工物の類全体のことだ」(五一〇 E)。

このようにして、可視界を表わす線分については、〔A D〕と〔D C〕の二分が、真实性の有無に対応し、それはまた思ひなされるもの(ト・ドクサストン)の認識されるもの(ト・グノオーストン)に対する関係がそのまま、似像(ト・ホモイオテン)の原物(ト・ホモイオーター)に対する関係と等しくあるように分割されている、とされる(五一〇 E)。

では、可知界についての線分はどうなのか、というところ、

「その一方〔C E〕は、こういうものだ。魂がそれを探求するにあたって、さきの場合には原物であったものを、この場合には似像として用いながら、いわゆる仮説から出発して(エクス・ヒュポテセオン)、始元へさかのぼる(エ・パアルケーン・ポレウオミュネー)のではなく、結末へと(エ・ピイ・テレウテーン)進んで行くことを余儀なくされる。これに対して、もう一方〔E B〕の探求にあたっては、魂は仮説から出発しながら、もはや仮説でない無仮説(アニユポテトン)の始元へさかのぼる

行き方をする。そして前者〔C E〕で用いられた似像を用いることなしに、直接実相そのものを用いて（アウトォイス・エイデュスイ）、実相そのものを通じて（ディアウトォーン）探求を行なうのだ」（五一〇 B）。と語られるが、グラウコンも言うように、これだけでは十分にわからない。そこでソクラテスは、後出（五一三 D）の間接知（ディアノイア）と直接知（ヌウース）の観点で説明する。

「君も知っていると思うのだが、幾何とか算数といった類いの学問をしている者たちは、奇数・偶数とか、図形のあれこれや角の三種類といった、その他これと同類の事柄をそれぞれの研究に依りて前提して、これらは既知のものとみなし、仮説として立てたうえで、これらについて理由を説明するのは、自分にも他の人にも不要であるとする。何人にも明らかだとするわけだ。そして、これらを出発点とし、そのうえで残余のことがらを首尾一貫した仕方に取り扱いながら、最後に、自分たちがとりかかった考察目標にまで到達することになる」（五一〇 C—D）。さらに、また、

「彼らは、目に見えぬ形象を補助的に使用し、この形象について論証を行うのであるが、彼らが思考をはたらかせて知ろうとしているのは、これら目に見える形象のことではなくて、それらを似像とする原物についてなのであり、彼らの論証は、そこに描かれている四角形や対角線のためにではなく、四角形そのもの、対角線そのもののためになされる」（五一〇 D—E）。

ということ、線分〔C E〕の種類のもものは、思惟によって知られるものであるが、しかし、その探求には、魂は仮説（前提）を用いざるをえず、その仮説よりも上方へは出て行けないかのように、始元にまでさかのぼることをしないのである（五一一 B）。

次に、線分〔E B〕の種類についてはどうだろうか。

「それ〔E B〕は、言論（ロゴス）がそれ自身で、問答の力を用いて接触する（ハプテエタイ・テ

ー・トゥー・ディアレゲスタイ・デュナメイ）ものであつて、仮説（ヒュポテンス）を絶対的始元とすることなく、文字どおりただ下に置かれるだけの仮定として、踏台やバネのように取り扱い、（上昇して）もはや仮定でないものにまで至り、万有の始元に到達しこれに触れる（メエクリ・トゥー・アニュポテトゥー・エピイ・テーン・トゥー・パントオス・アルケーン・イオーン）。そして、今度は逆にまた、この始元につらなるものと連絡しながら、最後の結尾に至るまで下降して行く（エ・コメノス・トオーン・エケイネース・エコメエノオーン・フूर्トオース・エピイ・テレウテーン・カタバアイネー）。その際、およそ感覚されるものを補助的に用いることはまづたくなく、ただ実相そのものを用いて、実相を通じて実相にいたり、そして最後に実相において終わるのだ（エイデエス・イン・アウトオイス・ディアウトオーン・エイス・アウト・カイ・テレウター・エイス・エイデー）」（五一—B—C）。

言うまでもなく、善のアイデアはプラトン哲学の核心をなすが、これまでに見てきたようにその超越性や窮極性を考えると、第七巻で検討される守護者（哲学者）教育のための具体的プログラム（五三—五A—五四—B）がもつ意味に改めて気づかされる。問答の力、すなわち問答法（ディアレクティケー）によらなければ、われわれは善のアイデアに到達できない。しかしながら問答法を習得するには、長年月にわたる厳しい訓練と実際経験を必要とするのである。それは洞窟の比喩でいわれる地下の暗闇から身を起こした魂が、もがき苦しみながら光輝く天上に向かって上昇していく行程に似ていると言えるだろう。

こうして、善のアイデアを認識する上昇の過程とそれから下降する過程とについて、ソクラテスが話し終えると、グラウコンは次のように述べる。

「わかります。充分に、とはいきませんがね。なぜって、あなたの言われるような仕事は、えらく

大変なものだと思われるからです。しかし、あなたが限界をはっきりさせたいと思っておられる点は、わかります……」(五二三C)

以下、議論は続くが、紙数も尽きたので、再論はいずれまたということにしてとしたい。